

広島市における郊外型大規模団地において多様な福祉活動を推進する地区社協の事例と分析

— 高陽ニュータウンB住区・落合東地区社協の取り組みより —

畠山 京子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

広島市においては、高度経済成長による人口集中により、デルタ部郊外の丘陵地に住宅団地が造成された。この時期に開発された団地は入居開始から約40年が経過し、少子高齢化及び人口減少、空家が発生し、孤独死も生じている。

高陽ニュータウンB住区では、近隣センターの大型スーパーが撤退し、空き店舗も増え、「買物に困る」等の声から、落合東地区社協が常設の活動拠点開設、朝市、更に学習塾等を開設。地元に住居する70歳から74歳の高齢者の女性の方々が主としてボランティアとして活動を担い、定例の「朝市」等、月約6回活動している。ボランティアを始めた動機は、「役員等に誘われた」「余暇の有効活用」「地域等のために役に立ちたい」である。ボランティアの良い点として、「新しい友達ができた」が圧倒的に多く、次いで「健康増進」「余暇の有効活用」であり、活動を担うボランティアの実態が明らかとなった。

落合東地区社協は、地元の課題を、地元の人びとのために、地元ボランティアが活動を担い、「朝市」「金平学習塾」「朝ごはん会」「花壇づくり」等持続して多様な取り組みを推進し、地域の絆を深め、地域活性化と、安心・安全な地域づくりを図っている。

キーワード：高齢化する郊外型大規模団地、落合東地区社協、朝市、ボランティア

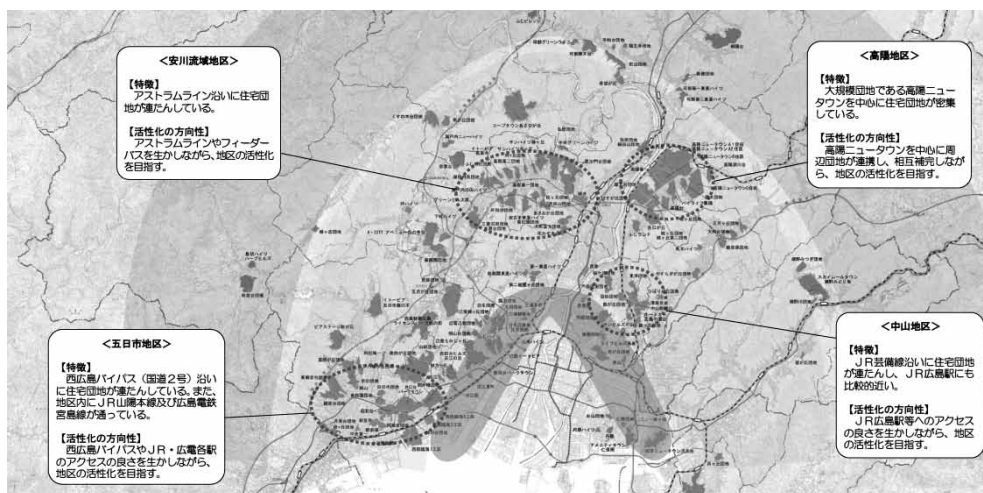
はじめに

高陽ニュータウンは図1の通り、広島市の北部、太田川の左岸の旧安佐郡高陽町の丘陵地を開発した大規模団地である。高陽ニュータウンはA、B、Cの3つの住区と諸木団地の4つの住区で構成されている。高陽ニュータウン内で、B住区が最初に分譲開始住区である。

団地内は幹線道路が整備され、バス停が団地内にあり、バスの便も頻繁にあるが団地内は坂道が多く、高齢等となると、移動に困難をきたす状況が生じている。

落合東地区社協は自主組織であり、地域の「買物に困る」「エレベーターがないので、荷物を持って階段を上がったり降りたりが辛い」等の声を生活上の困難として受け止め、地区の課題として取り組んでいる。

広島市では平成25年8月20日豪雨災害が発生し、安心・安全の地域づくりには平素のつながりが重要であり、落合東地区社協の先駆的な取り組みは、一斉に高齢化が進む他の住区、団地にとり、今後の参考となるものであり、組織、事業展開、ボランティア等について分析し考察する。



出典：「住宅団地の活性化に向けて」 広島市

図1 高陽ニュータウンの位置図

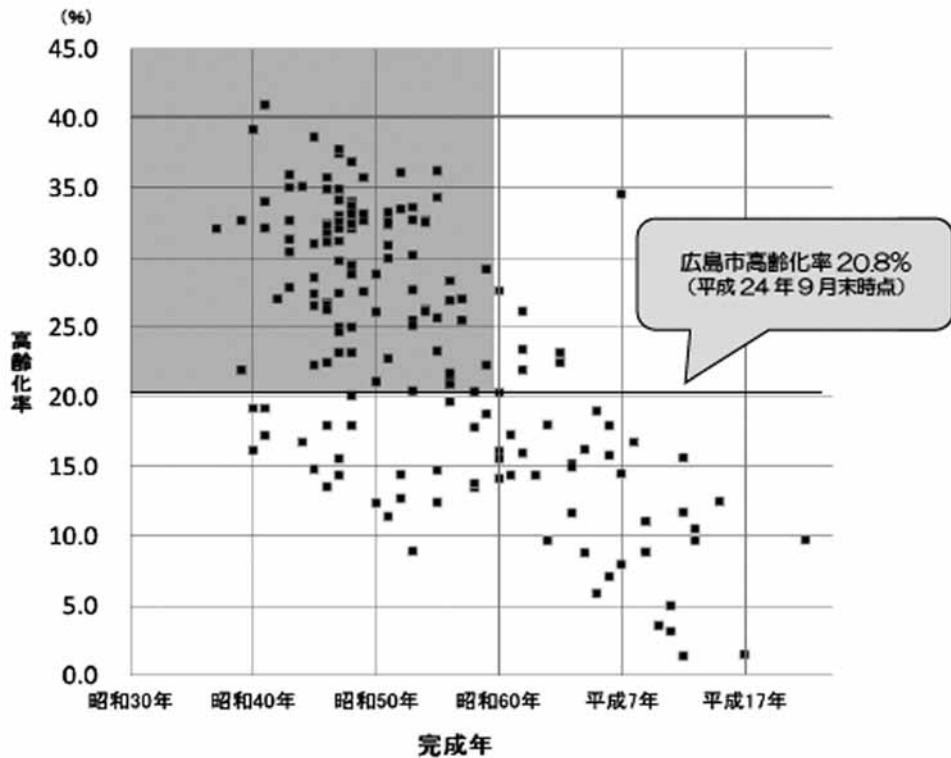
1. 高陽ニュータウンの概要及び落合東小学校区の現況

広島市全体の人口は増加しているが、高陽ニュータウンは、ピーク時の人口は1992（平成4）年の22,212人、2012（平成24）年9月末現在、17,432人へと減少している。図2の通り、広島市全体の高齢化率に比して住宅団地の高齢化が高く、高陽ニュータウン全体の高齢化率は27.9%であり、広島市全体を7.1ポイント上回っている。高陽B住区は同時点で、世帯数は1,753世帯、人口は3,839人、高齢化率は21.7%で、他住区と同様に高齢ひとり暮らし世帯、孤独死が増加している。

落合東小学校区は公営住宅、公社賃貸住宅、公社分譲住宅からなる高陽B住区とはほぼ重なり、一部旧来の農村部を含んだ落合東小学校区をエリアとしている。高陽B住区は都心から10.3kmで、幹線道路の幅員は16.0mで両側に歩道が整備され、生活道路の標準的幅員は6.0m、一部片側歩道である。高陽B住区全体の傾斜は4.2%であるが、高陽B住区から高陽A住区へは、坂道を下り、更に坂道を登らなければならない、高齢等となると荷物を持つての徒歩での往き来は困難である。

図3のJR芸備線の玖村駅から1.7kmに位置し、バスは広島バス、広島交通、中国JRバスの3社が併行して運行し、団地内にはバス停があり、平日は合計267便が運行しており、交通機関は便利である。暮らしの面では、B住区近隣センターのスーパーが撤退、店舗は当初は6店舗あったが、現在は酒屋、薬局、理髪の3店舗が残っているのみである。

更に、75人が亡くなった広島土砂災害の八木は、太田川を挟み対岸となる。図4の写真の通り、土砂災害の跡が阿武山の山肌に残り、安全・安心のまちづくりが求められている。



出典：「住宅団地の活性化に向けて」 広島市

図2 住宅団地の完成年度別の高齢化率の状況



出典：著者撮影

図3 JR 芸備線玖村駅



出典：著者撮影

図4 土砂災害の跡が山肌に残る太田川対岸の阿武山

2. スーパーの撤退と空き店舗への常設活動拠点の開設

(1) スーパー撤退

B住区の中心にあるスーパーが2007（平成19）年7月に撤退し、食料品、生鮮食料品等の購入がB住区内ではできず、高陽ニュータウンのA住区の大型スーパー「フジグラン高陽」まで買物に行かなければならなくなった。更に高層の県営住宅にはエレベーターがなく、高齢化、障がいのある方々にとって「階段の昇降が難しい」との声が、地区民生児童委員、地区社会福祉協議会等に寄せられるようになった。

(2) 空き店舗への常設活動拠点の開設

常設の活動拠点として、落合東地区社会福祉協議会（以下、落合東地区社協）の立石義敬会長は、図6の60戸の賃貸住宅として広島県住宅供給公社が管理する高陽金平団地のスーパー撤退後の空き店舗1階の一部を折衝して借り受け、2008（平成20）年7月5日に図5の地区社協事務所、多機能型活動拠点を有する「落合東福祉センター（以下、センター）」を開設した。机等のセンター内の備品は不要品の活用、手作りで整備し、センターは、日曜日・祝日を除く毎日、午前10時から午後3時まで地元ボランティア25人が輪番で開館している。センターは安佐北区社会福祉協議会、地元自治会連合会等の助成金等により自主運営し、本年7月で7周年を迎えた。



出典：著者撮影

図5 「落合東福祉センター」



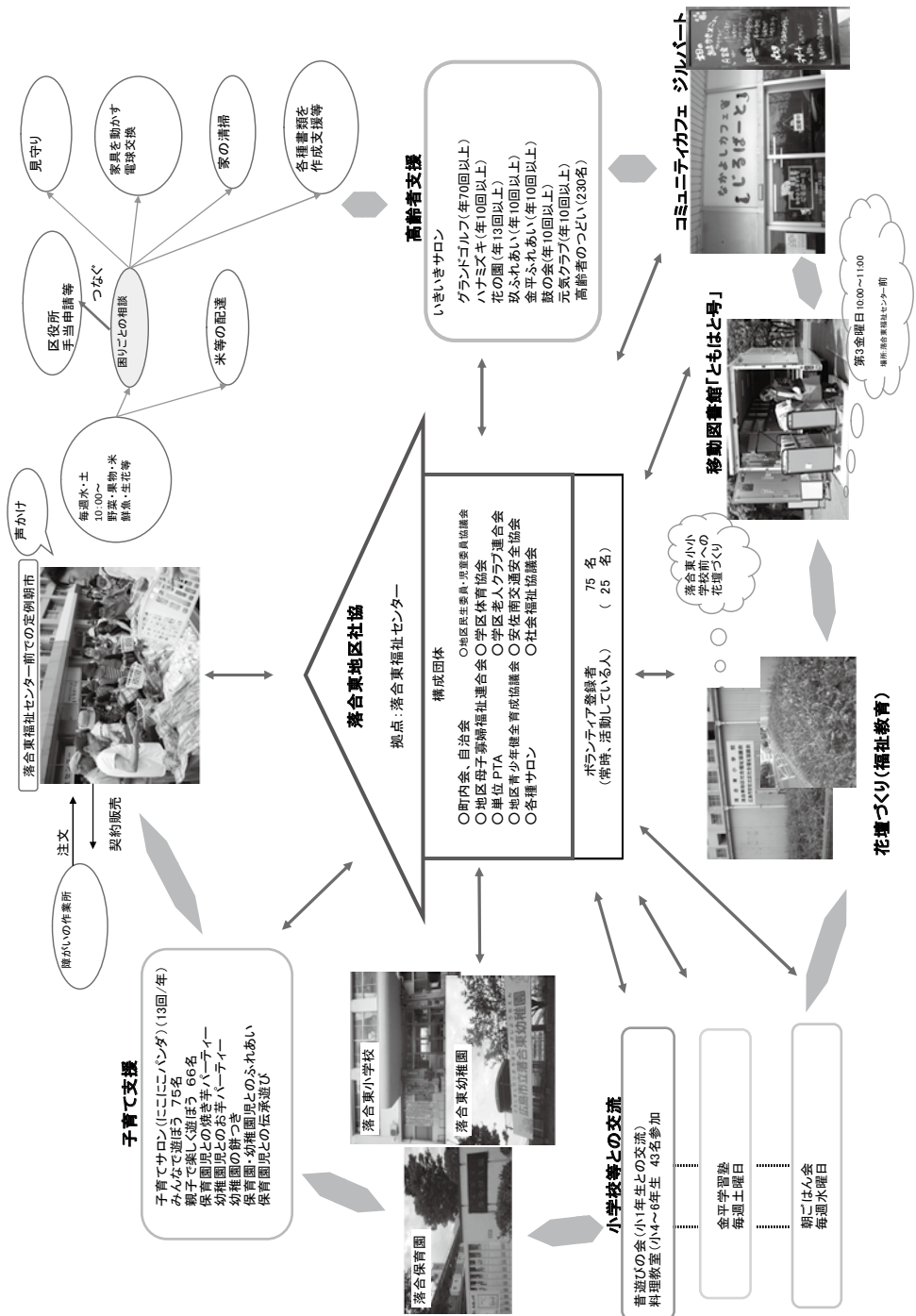
出典：著者撮影

図6 高陽金平団地（広島県住宅供給公社）

3. 落合東地区社協によるセンターの運営体制について

(1) 落合東地区社協の運営体制について

落合東地区社協の運営体制は図7の通り、町内会・自治会、地区民生委員、地区民生委員児童委員協議会、地区母子寡婦福祉連合会、学区体育協会、単位PTA、学区（地区）老人クラブ連合会、地区青少年健全育成協議会、安佐南交通安全協会、各種サロン参加者等により構成されている。地区内の各種地域団体により落合東地区社協が組織され、自主的団体としてセンターを運営し、住民相互の助け合いで地域の課題を解決するための取り組みを推進している。

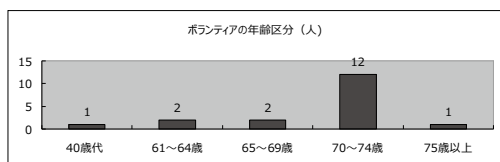


出典: 著者作成

図7 落合東福祉センターの組織体制及び活動について

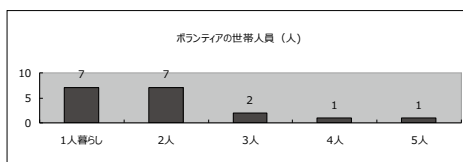
(2) センター活動を担うボランティアについて

センターのボランティア登録者75人のうち、常時、センターの活動を担うボランティアは25人であり、活動はすべて無償である。「落合東地区社協ボランティア調査」では18人が回答し、全員が地元に住み、図8の通り70～74歳の女性が約7割を占め、世帯の人員については8割がひとり暮らし及び2人世帯である（図9）。



出典：落合東地区社協ボランティア調査

図8 ボランティアの年齢区分

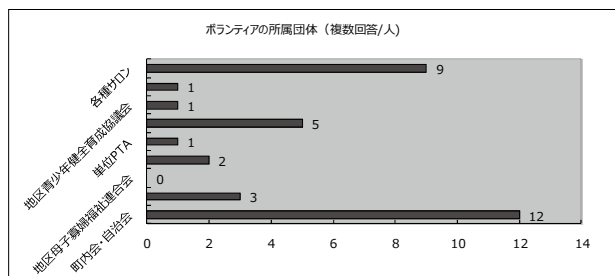


出典：落合東地区社協ボランティア調査

図9 ボランティアの世帯人員

(3) ボランティアの所属団体について

町内会・自治会の会員が最も多く、次いで高齢者の「いきいきサロン」等の参加者である。落合東地区社協エリアの地域に住む住民自らが、ボランティア活動を担っている（図10）。



出典：落合東地区社協ボランティア調査

図10 ボランティアの所属団体

4. 落合東地区社協によるセンターの事業展開について

(1) 活動拠点での取り組み

業務としては図7のとおり、他の地域でも実施している「いきいきサロン」、高齢者のつどい、子育て支援等としては、子育てサロン、保育園・幼稚園でのお芋パーティ、幼稚園の餅つき、保育園児との伝承遊び等を実施。小学校との交流については料理教室等を実施。落合東小学校前の花壇づくり、本に親しむ機会をと2,000冊の図書を積載した移動図書館「ともはと号」の巡回（第三金曜日）の世話等を展開している。センターを会場とした絵手紙教室、手芸教室等を定例的に実施している。

落合東地区社協で実施する活動の「朝市」「金平学習塾」「朝ごはん会」については、次の通りである。

(2) 地域の「困った」を受け止め、朝市を開始

スーパー撤退により地域住民から「買物に困っている」との声が寄せられ、落合東地区

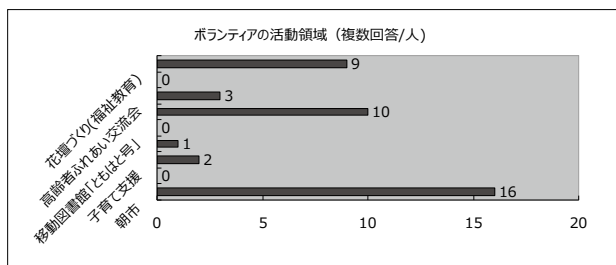
社協の立石義敬会長は、「買物に困る高齢者のために地区社協で店を開こう！」と決断。

B住区近隣センターのスーパー撤退跡地に新たに設置したセンターを活動拠点とし、野菜の仕入先は地元の玖村、更に広島県内の世羅町の生産農家に出向き、出店の依頼交渉をして朝市を2008（平成20）年7月5日にスタートした。

朝市は現在、センター前で週2回（毎週2回水曜日、土曜日）朝10時からスタート。その運営については、当番表を作成して地元の落合東地区社協ボランティアが販売にあたっている。ボランティアの活動領域としては図11の通り、朝市へのボランティア参加が約4割と最も多く、1ヶ月当たりの平均活動回数は約6回である（図12）。

販売開始の30分前には近所の大勢の人がセンター前で待ち、待ち時間が住民同士の交流の場ともなっている。野菜、果物、鮮魚、米、切花、花苗を販売し、多い時には70人もの人々の来所で賑わい、20分足らずで売り切れとなることが再三である。

図7のとおり、米等の重いものは、地元ボランティアの運営スタッフが無料で県営住宅等への高層階の自宅へ届け、見守り、そこで更にくらしの困りごとの相談を受け、家の清掃、電球の交換、各種書類作成支援等の地域での相互の助け合いとして、機能している。区内の障がいのある人の作業所へ毎週野菜の特別契約販売を行うと共に、障がいがある利用者の方々との交流も行っている。

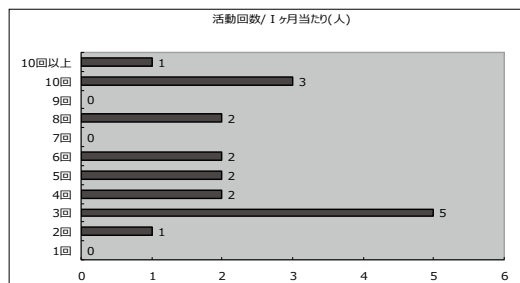


出典：落合東地区社協ボランティア調査

図11 ボランティアの活動領域

ボランティアの活動領域は複数回答であり、「朝市」が約40%（16名）と最も多い。次いで「高齢者サロン」「高齢者ふれあい交流会」の高齢者領域が約30%（13名）落合東小学校前の「花壇づくり」が約22%（9名）である。

ボランティアの活動回数は、1ヶ月に3回が27%で最も多く、平均は6回である。10回以上と頻繁に活動する方も22%いる。年齢と回数については70歳から74歳の方々が最も活動が多い。



出典：落合東地区社協ボランティア調査

図12 ボランティアの活動回数/1ヶ月当たり(人)

（3）金平学習塾、朝ごはん会

地域子ども達、小学校4年生から6年生を対象とする「金平学習塾」が毎週土曜日に、元教員と広島市内の教師志望の学生ボランティア団体メンバーを講師として、学

力向上，居場所づくりを目的に，無料で2013（平成25）年3月9日からスタートした。

ボランティア学生は，「子どもたちと年齢が近いので，思いを受け止めて，持てるちからを引きだし，学びにつなげている」「学生が責任をもって行えるので，教師になった時の具体的ノウハウが身につく」と，訪問時にボランティアのやりがいを話してくれた。

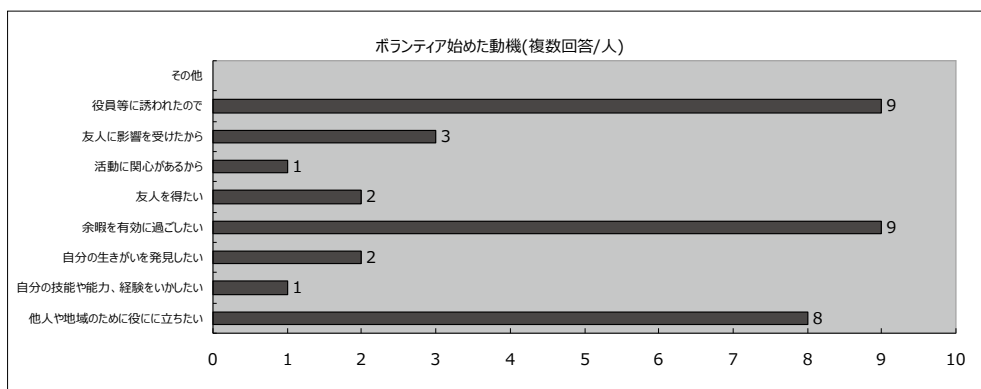
更に地域の「朝食を食べさせられない」「食べさせられない」「食べない」子ども達を対象に，地区社協ボランティアが水曜日の7時から8時まで朝食を提供している。

（４）コミュニティカフェ・なかよしカフェ「ジルバート」の開店

センターの隣には，センターと同様にカウンター等を手作りのした，なかよしカフェ「ジルバート」が平成26年9月にオープンした。月曜日から土曜日の10時から18時30分まで開店している。1人で運営に携わっている落合東地区社協・平井初枝前会長は，広島市立保育園で給食調理に携わり，地区社協前会長として地域での相談を受け「一人暮らしの栄養状態」「集う場の必要性」を感じ，定年退職後に「ジルバート」の運営にボランティアとして従事。「高齢者の日頃からの交流の場」「食事ができる」と，利用される方から喜ばれている。訪れた日の日替わり定食はご飯，さんまの甘酢煮，大根煮物，きゅうり等の酢物，味噌汁，自家製漬物，果物で550円。ご飯のお代わりは可で，手作りで野菜の多い献立を工夫し，安価な値段で提供し，B住区内のつどいの場の役割を果たしている。

（５）落合東地区社協におけるボランティア開始の動機及びよい点について

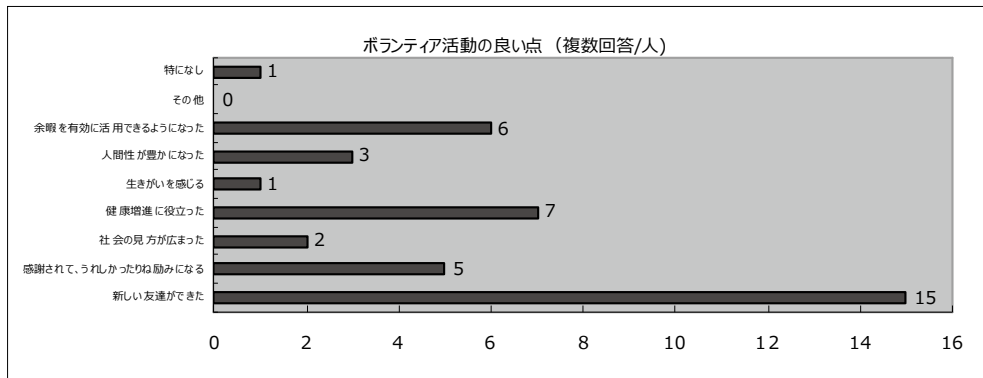
落合東地区社協では幅広い人々がボランティアとして参加している。ボランティア開始の動機については，図13の通り「役員等に誘われた」「余暇の有効活用」が最多で，次いで「他人や地域のために役に立ちたい」が続いている。ひとり暮らし世帯と動機の相関は，「余暇の有効活用」が33.3%，次いで「友人に影響を受けた」「他人や社会の役に立つ」が同じく20%である。



出典：落合東地区社協ボランティア調査

図13 ボランティアを始めた動機

ボランティア活動の良い点としては、図14の通り、「新しい友達ができた」の回答が最も多く、「健康増進に役立った」「余暇の有効活用」が続いている。年齢別との相関では、70歳から74歳では、「新しい友達ができた」が35.7%と最も高く、続いて「健康増進」「余暇利用」が同じく21.4%と続いている。



出典：落合東地区社協ボランティア調査

図14 ボランティア活動の良い点について

5. 落合東地区社協の取組みのまとめと分析について

落合東地区社協の取組みの特徴として、(1) 落合東地区社協エリアにおいては、町内会、自治会等で構成する落合東地区社協を中心に推進体制を確立。落合東地区社協が各種団体を調整・連携し、広くまちづくり全体を推進し、団地の再生・活性化を果している。

(2) 徒歩で行けるB住区近隣センター・スーパー撤退跡地へ、落合東福祉センター及びなかよしカフェ「ジルバート」の活動拠点が整備されたことにより、住民が自由に立ち寄り、つどい、サロン活動等の実施により、人と人が出会い、住民相互の交流が図れ、互いの絆を深める役割を果している。

(3) 落合東地区社協が住民の「困ったこと」(要望)を自分たちの課題として受け止め、新たな課題発見として位置付け、支援し、必要に応じて行政等へつなぎ、地域課題の解決を図っている。

(4) 自主団体として現在7周年を迎え、運営については各種補助制度を活用し、更に朝市、センター利用料、バザー等で自主財源を確保し、センターの光熱費・水道代等の必要経費を捻出し、独立採算制で多様な取り組みを推進している。

(5) ボランティアの実態について、地元に住居する70歳から74歳の高齢者の女性の方々がボランティアとして活動を担い、月約6回活動している。活動は「朝市」が最も多く、次いで高齢者サロン等の高齢者領域である。ボランティアを始めた動機は、「役員等に誘われた」「余暇の有効活用」「地域等のために役に立ちたい」である。ボランティアの良い点として、「新しい友達ができた」が圧倒的に多く、次いで「健康増進」「余暇の有効活用」

と回答している。落合東地区社協では、共に暮らす住民がボランティアとして支援し、共に支え合う地域を構築している。ボランティアの方々は、「無理せず、できる人が、できることを行う」「ボランティアは楽しい」と語り、ボランティア参加によって友人ができ、健康増進につながるという循環がうまれていることがみえる。

6. 今後の課題について

落合東地区社協7年間の歩みは、無償のボランティアの方々のみで担い、寄せられる「困ったこと」（要望）、更に地域課題に対して次々と、具体的な支援としての展開を図っている。今後の課題として、（1）落合東地区社協は福祉課題のみならず、地域の子どもを対象としての学習支援・居場所づくりの「金平学習塾」、更に子ども達に朝食を提供する「朝ごはん会」と、学び・食への支援を先駆的に取り組んでいる。今後、小学校・幼稚園・保育園と支援が必要な子どもやその家庭へ、「金平学習塾」「朝ごはん会」の周知等、今後一層の連携を図っていくことが望まれる。

（2）現在、ボランティアは地元の70歳代前半の高齢の方々が担っている。世代交代が進むため、今後、新たに40歳から60歳代のボランティアを担う方々を募ることが急務であろう。

おわりに

筆者も落合東地区社協と同じく高陽ニュータウンのA住区に居住している。入居から約40年が経過し、約100世帯の真亀自治会では高齢のみ世帯、高齢の一人暮らし世帯が30%を越えている。真亀自治会エリアで「真亀さくらクラブ」（いきいきサロン）をボランティアで地元の皆さんと立ち上げ、3年目となる。A住区内のスーパーが撤退し、空き店舗も生じ、「カフェ機能のあるつどいの場（常設の多機能活動拠点）」が便利なところにあったらいいね！」との声が出ている。

落合東地区社協ではスーパーが撤退し、ゼロからのスタートをして拠点整備等を推進した落合東地区社協のすべてのとりまとめを行う立石義敬会長は、「“カバチ”（広島弁で文句をいう）を言うより、まず実行」「まず、一歩踏み出す」「誠心誠意やると続く」「不備なところは補っていく」と語る。高齢化等が進む他団地・他住区等において、落合東地区社協のような他地域の取り組み事例を学び、各々の地域実態に即して取り組みを進め、団地再生と更に団地の魅力向上を図っていくことが期待される。

参考文献

- 落合東地区社会福祉協議会（2015）「落合東地区社協ボランティア調査」
- 畠山京子（2015）「高齢化する団地で安心して住み続けるために」月刊春秋
- 広島市（2015）「広島市住宅団地の活性化に向けて」